

日本におけるイスラーム団体の形成と活動の変容

—イスラーム復興運動と成員の多様化に注目して—

早稲田大学 岡井宏文

1 目的

1990年代初頭より、日本各地の移住者が中心となってイスラーム団体が形成され始めた。このような団体は、モスク設立、教育、宗教法人・墓地の取得、周辺社会との関係構築活動等の担い手となってきた。これまでイスラーム団体の活動や役割は、こうした一般的なレベルでは提示されてきたものの（店田 2015）、各団体の差異や特徴が十分に明らかにされたとは言えない。イスラーム団体は、思想、出身地、性別など様々な基盤のもと形成されており、国内外の組織との繋がりを有しているものも少なくない。こうした要素を踏まえ、日本において、イスラーム団体がどのように形成され、現在どのように展開しているのかという点について考察することを目的とする。

2 対象と方法

本報告は、タブリーギー・ジャマーアト（以下 TJ）を対象とする。北インド発祥のイスラーム復興運動であり、一般信徒による伝道活動を通じて自他のイスラームへの回帰を目指すことに特徴がある。イスラーム世界のみならず欧米など移民社会において支持を集めているが、世俗社会と距離を置く行動様式から、特に移民社会において、他のムスリムや地域社会から分離主義的と批判されるケースも生じている（Pieri 2015）。報告者は、関東、東海地方に位置する TJ が管理運営を行うモスク、小規模礼拝所における代表者・活動参加者への聞き取り、その他のマスジド（非 TJ 系）における聞き取り、文献・資料調査（団体出版物等）を実施した。その結果、次の事柄が明らかとなった。

3 結果

組織的な概要をみると、TJ が運営する宗教法人が所有するモスクは、全国に 16 ヶ所存在している。これは、日本のイスラーム系宗教法人として最大規模である。活動は、全国に 6 ヶ所存在するマルカズ（本部）を中心に、各地の TJ が所有するモスク、その他の団体のモスクや小規模礼拝所において、重層的に展開している。諸地域の活動動向は、定期的に開催される地域／全国規模の活動報告集会を通じて共有されており、インドの世界本部との緊密な連携のもと運営されている。参加者は外国出身の第一世代が多数を占めるが、近年、日本人改宗者や第二、三世代が漸増傾向にあり、出身地、職業等においても多様化がみられる。一般的な宗教儀礼のほか、TJ 特有の宗教活動、出版、宗教法人・教育施設の管理・運営等が活発に行われている。一方、周辺社会との関わりや関係構築等の動きは、組織的なものとしては低調である。しかし近年「日本人ジャマーアト」など独自の活動の開始、日本語の主要言語化、非ムスリムへの接遇改革などの変化が生じており、それに伴う議論が生起している。

4 結論

現在の TJ の活動は、TJ の宗教実践を中心に据えつつ、ムスリムの生活における需要を満たす内向き志向の活動が中心となっている。他方、他のイスラーム団体や地域社会との関係構築といった動きは低調であるが、独自の活動の展開や活動方針の変化にみるように、日本のコンテキストと連動する動きが生じている。こうした動きの背景には、参加者間の緊張が内在している。近年の成員の多様化は、いわばハビトゥスの多様化をもたらすこととなった。TJ の理念や参加者間の同胞意識はある程度保持されながらも、団体や実践の在り方や周辺社会との関わり方についての考え方は、出身地や職業、世代の相違等を背景として多様化し、自己変容の過程にある。

参考文献

Pieri, Z., 2015, *Tablighi Jamaat and the Quest for the London Mega Mosque: Continuity and Change*, New York City: Palgrave Macmillan.

店田廣文, 2015, 『日本のモスク—滞日ムスリムの社会的活動』山川出版社。